

# 山と博物館

第40巻 第2号 1995年2月25日

大町山岳博物館



「陽春の岳樺」 柵池自然園にて赤外フィルム使用 写真と文 内川芳郎

## 岳樺

安曇野の田植えが終わる頃、木々の緑は日一日と濃くなって、アルプスの雪形も急速にその姿を変えていく。この時期の春山はまだ雪がたっぷり残っていて春と冬が同居している。好天の一日、早朝堅くしまった残雪を踏みしめて数時間、樹林帯を抜けて岳樺が姿を見せ始めると稜線までもう一頑張りだ。ザラメ雪の上にザックをおろし、ここで休憩。早速カメラを取り出して岳樺を前景に春霞のかかった山々を撮る。時間があればコーヒィを沸かして大休止、光あふれる春山を満喫できるひとときである。山の写真は朝と夕方が勝負といわれるけれど、私は春の陽光に輝くこの真昼の景色が大好きである。蝶ヶ岳の岳樺と常念岳、合戦尾根の岳樺と燕岳、遠見尾根の岳樺と鹿島槍……。

まだ若葉を付けていない岳樺は、他の草木が深く残雪に埋もれている山で唯一の生命の息吹を感じさせる存在である。春の日差しを浴びて幹や枝を一層輝かせている様子は、あたかも長くて厳しい冬から解き放された喜びを表現しているかのようだ。

新緑や黄葉もすばらしいが、季節の狭間の中で、ひとときわその存在を主張しているように見える裸の岳樺。早春や晩秋、そんな岳樺を見つけると、ついカメラを向けてしまう。

(日本山岳写真協会松本支部)

# 動物の足跡

## 子安和弘

雪の降る季節には動物(哺乳類)の足跡に注意を向けてみると面白い。雪と言っても何メートルも降り積もったそれではなくて、長靴のような装備でも充分歩きまわられる程度に浅い積雪の方が好都合である。もつと楽をしたければ、スキー場のリフトやゴンドラに乗った際に眼下にひろがる雪の上を探してみればよい。種類はわからなくても「何かの動物」の足跡が続いているのが目撃できるだろう。

こうした足跡を偶然にみつけることは、それだけでも愉快なことなのだが、もつと積極的に「足跡探し」をする場合もある。これが「トラッキング」である。「トレッキング」ではないことに注意。ここでいう「トラッキング (Track)」というのは「動物の生活痕」という意味であり、トラッキングは直接姿をみることの困難な野生動物をその痕跡から間接的に観察する方法なのである。

### ●足跡を探すための方法

足跡は湿地の泥の上や川原の砂の上にも残るから、野生動物の足跡を探すにはその動物の習性がある程度知っているにこしたことはない。ところが、足跡を見てもその動物の種類が見当もつかないという人は、そもそも色々な野生動物の習性自体に不案内な場合が多いであろう。そのような人には、とにかく雪の上の足跡を探してもらうのが一番である。

一面に積もった雪は、余計なものを覆い隠してしまふので、それが人のものであれ動物のものであれ、雪の上に残された足跡などの痕跡をみつけやすくしてくれるのである。

雪の上に野生動物の足跡をみつけたならば、しばらくその跡を追いかけてみよう。野生動物と言えどもわざわざ歩きづらい道を選んではせず、登山道や車道を堂々と使っているのにすぐ気づかれるであろう。大部分の野生動物は野外をでたために歩いているのではなく、「けもの道」と呼ばれるようにその通り道も大体決まっているのである。

さて、少し足跡を追いかけた跡でその足跡をつけた動物の名前を考えてみよう。キツネ? それともタヌキ? まてよイタチとかオコジョなんて動物もいたはずだ。ノウサギの足跡ならみることがあるがこれとは違う・・・、などと考えてみてもそこでストップしてしまふのでは残念である。そこで野外で簡単にこうした足跡を見分けるためのガイドブックが必要になってくる。詳しくは参考文献にあげた本などをみていただくとして、おおまかなところを図1にまとめてあるので参考にしていただきたい。

### ●足跡の同定に必要な知識

さてここで、野外における動物の足跡の持ち主の名前(種名)を調べて決定する(同定する)にはどうしたらよいのかについて述べ

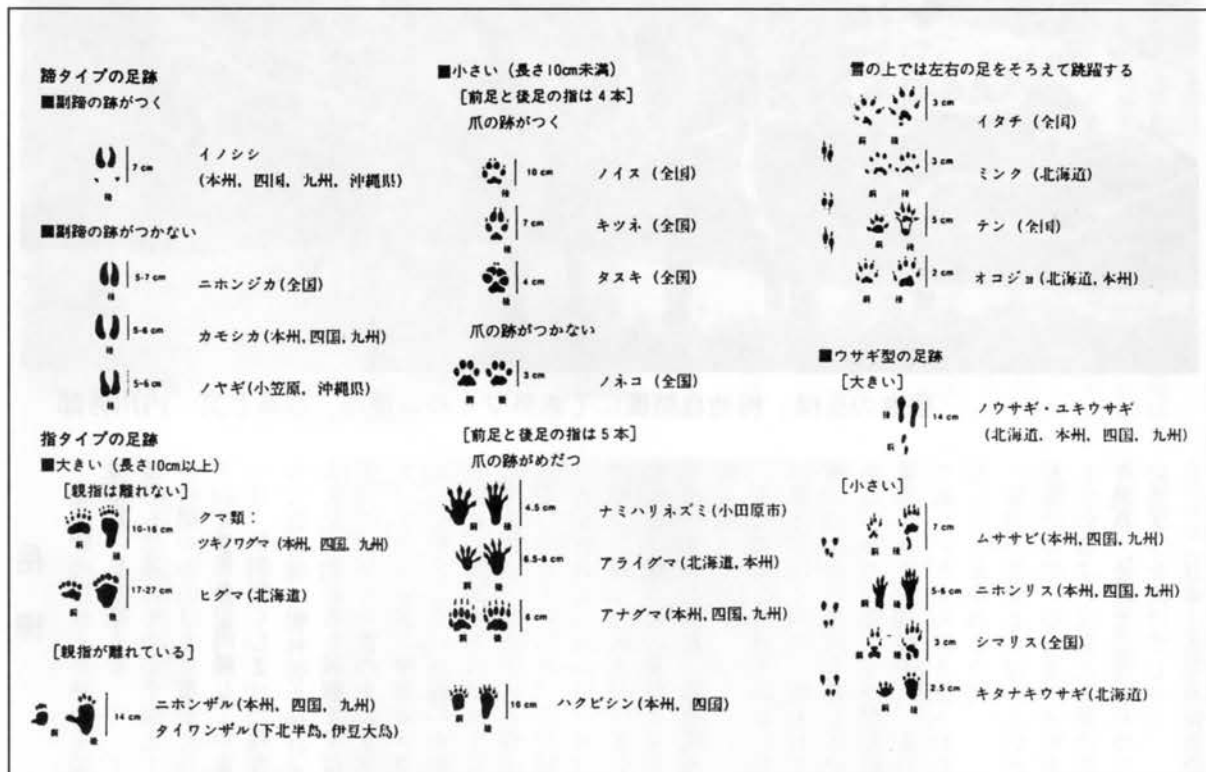


図1, 足跡一覧 (子安, 1993より)

表1, 日本産陸生哺乳類のチェックリスト

日本で足跡が見られる可能性がある陸生哺乳類 (野生化した家畜, 移入種を含む)	
<p>●食虫目</p> <p>ナミハリネズミ アズマモグラ オオモグラ (コウベモグラ) サドモグラ ミズラモグラ センカクモグラ ヒメヒミズ ヒミズ チビトガリネズミ ヒメトガリネズミ バイカルトガリネズミ サドトガリネズミ アズミトガリネズミ オオアシトガリネズミ カワネズミ ジャコウネズミ オリイジネズミ コジネズミ オナガジネズミ ジネズミ</p> <p>●霊長目</p> <p>タイワンザル ニホンザル</p> <p>●食肉目</p> <p>ノイヌ キツネ タヌキ ツキノワグマ ヒグマ アライグマ オコジョ イイズナ イタチ ミンク テン クロテン アナグマ カワウソ ラッコ ハクビシン ハイイロマングース ノネコ ベンガルヤマネコ (ツシマヤマネコ) イリオモテヤマネコ</p>	<p>●偶蹄目</p> <p>イノシシ (ノブタ) ニホンジカ カモシカ ノヤギ</p> <p>●奇蹄目</p> <p>ノウマ</p> <p>●齧歯目</p> <p>キタリス (エゾリス) ニホンリス タイワンリス シマリス ムササビ タイリクモモンガ ニホンモモンガ ヒメヤチネズミ タイリクヤチネズミ (エゾヤチネズミ) ムクゲネズミ ヤチネズミ スミスネズミ ハタネズミ マスカラット リュウキュウトグネズミ カヤネズミ ヒメネズミ アカネズミ ハントウアカネズミ セスジネズミ ハツカネズミ オキナワハツカネズミ クマネズミ トブネズミ ケナガネズミ ヤマネ ヌートリア</p> <p>●ウサギ目</p> <p>キタナキウサギ アマミノクロウサギ ユキウサギ ノウサギ アナウサギ</p>

ておこう。

まず第一に重要なことはその地域に生息している動物の名前を知ることである。こうした動物の種名リストは「チェックリスト」と呼ばれるのであるが、完成したものをどこかで探す、というよりは自分でそれを作るつもりで調べるほうがよい。それはリストを作る楽しみがあるという理由のほか、適当なものがみつからないことの方が多いという現実的な理由からでもある。

日本の動物で陸上に足跡を残す可能性がある野生哺乳類のチェックリストを表1に示してみた。なんと七十九種という多数にのぼっている。この中には空中を飛翔するコウモリの仲間(翼手目)や海中生活をするクジラの仲間(鯨目)とアザラシの仲間(鳍脚目)は含まれていない。日本国内であれば、どの地方であつてもこのリスト内の種名を組み合

わせたチェックリストができるはずである。表1のリストをみていただきたいのは、これだけ沢山の種類の陸生哺乳類が日本に生息しているという事実をまず知っておいてほしいからでもある。日本で見つかる可能性のある野生哺乳類の足跡は、確実にこの中のどれかのものであるはずなのだから。ただし、あくまでもこれは可能性であつて、生息地を調べてみると局地的にしか分布のみられないものも多いから、種類数の多さをそれほど恐れる必要はない。

●足跡の見分け方

足跡の持ち主の種名を同定する際に重要な第二のポイントはその足の裏の形である。足跡は足の雄型でもあるのだから少し考えればその重要性は理解していただけるであろう。

足跡の同定に際しては、まず「蹄(ヒツ

メ)」の有無がポイントになる。日本産の野生哺乳類で蹄を持つものは表1の偶蹄目四種と奇蹄目一種だけである(北海道では家畜のブタが野生化してノブタとなつてゐる場所があるがノブタとイノシシは同種である)。蹄のある足跡は「蹄タイプ」と呼び、蹄のない「指タイプ」の足跡との区別は簡単である。蹄タイプの例として図2aにカモシカの足跡を、指タイプの例として図2bにニホンザルの足跡の例を示しておく。

蹄タイプの足跡を残す哺乳類のうち、ノヤギ・ノブタ(偶蹄目)とノウマ(奇蹄目)の分布は狭い範囲に限られているので、実際に野外で蹄タイプの足跡がみられた場合には、それはイノシシ・ニホンジカ・カモシカのうちのどれかに限定されてしまう(図1)。雪の上の足跡の形は、これらの三種がどれもよく似たものとなるので、種名の同定は食痕や

糞など他の痕跡から判断することになる。

一方、指タイプの足跡で雪の上の足跡が特徴的なものが食肉目イタチ科に属する哺乳類である。イタチ・ミンク・テン・オコジョなどがこのグループにはいるが、これらの動物は雪の上では左右の足をそろえて跳躍し、さらに前足のついた跡の上に後足の跡が重なるので一対の足跡が等間隔で続く足跡になるのである(図1、図2c)。イタチ科の数が同じ場所に生息しているところでは、個々の足跡の大きさと足跡の間隔、足跡以外の痕跡などから総合的に判断しなければならぬ。

指タイプの足跡の中でも小哺乳類と呼ばれる食虫目と齧歯目の足跡はその小ささと尾や足跡の跡がつく独特のものとなる。図2dはこうした小哺乳類の足跡の代表としてアカネズミが雪の上を跳躍しながら移動したものを示している。同じ個体が二往復した足跡と考えられるが、別の個体が通つた可能性もある。

●自然の見方

足跡を見ることも自然を見る方法のひとつには違いないが、自然という素材をもとにして歌を読むこともできれば、芸術写真を撮影したり風景画を描くことも可能であろう。ただ日本の伝統的な文化の中では、「自然を記述する」という作業は感動を伝えるための文学や芸術分野にのみ吸収されてしまひ、科学の基礎となる客観的な記述をおこなうという分野を育ててこなかつたように思う。

自然の中で生物がどのように存在し

## 図2, 雪の上の足跡

北アルプスにて  
(宮田 渡氏撮影)



b: ニホンザルの足跡  
(1993年12月30日、高瀬谷)



a: カモシカの足跡 (1994年1月2日、高瀬谷)

ているのかを記述することは「ナチュラリストロリー」と呼ばれる分野に相当するのであるが、この言葉の持つ意味を十分に伝える言葉が日本語では今だに未成熟であるように思われる。この言葉に対応して「博物学」がまず登場し、最近では「自然史(誌)」という言葉も使われるようになってきているが、これらがむしろ文学的な響きを持つがゆえに一般に誤解を生じさせているようにも感じられるのである。

ナチュラリストロリー的な自然の見方では、まず正確であることが第一に要求される。それは自然に対する認識を客観的に伝えることが原則になるから、対象の発見とそれを同定して記述できることが出発点となるのである。日本において、一般に博物館となづけられた施設が展示に関して多くのエネルギーをさかされてしまい、資料の収集・整理・研究といった面での機能が不十分である、という批判は一理あると思われる。こうした批判は裏を返せばナチュラリストロリー的な自然の見方を支える施設として「博物館」が存在してほしいという熱い要望の反映であると受け取るべきであろう。



c: テンの足跡 (高瀬谷)

●参考文献  
今泉忠明：新アニマルトラック 野性動物の足跡を追って。自由国民社、一九九四。  
子安和弘：フィールドガイド足跡図鑑。日経サイエンス社、一九九三。

自然を客観的に記述していくという態度は目先の利益や損得勘定からは程遠いものがある。したがってどの国でもこうした施設や人員に対する経済的待遇は悪化しているのも事実である。不景気に苦しむとはいえ、経済大国となった日本において「ナチュラリストロリー」という言葉が一般用語として不自然な響きを持たなくなる日が早く来ることを切望している今日この頃である。

(愛知学院大学歯学部講師)



d: アカネズミの足跡 (1994年1月10日、高瀬谷)。

宮尾嶽雄(監修)：長野県動物図鑑。信濃毎日新聞社、一九七八。  
鳥居春己：静岡県の哺乳類。第一法規出版、一九七九。  
安間繁樹：アニマル・ウォッチング。晶文社、一九八五。

山と博物館 第40巻 第2号  
発行所 千歳長野県大町市 TEL.026-221-1111  
印刷所 大町 山岳博物館  
長野県大町市俵町 大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一、五〇〇円(送料共) 切手不可  
郵便振替口座番号 〇五西 〇七 三三九三